

# 『菅原伝授手習鑑』における菅丞相

井 上 勝 志

## 親子の別れ場

延享三年八月、竹本座で初演された『菅原伝授手習鑑』は、正本の内題下に竹田出雲作とあり、本文末に「作者連名」として並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の名前が記される合作作品である。合作の分担について、『続歌舞伎年代記』巻の拾四（一九二二年十一月、市村座）が伝える逸話がある。次の狂言では、二段目、三段目、四段目と続けて親子の別れ場を作ろうと思うという三好松洛の発案によって、「二段目道明寺の段を松洛三段目桜丸腹切の場を並木千柳四段目寺子屋の場を竹田出雲」と持ち場が定まったという。圖を引いて、作者の受け持ちを定めたというのは眉唾物であるが、延享三年春の『楠昔噺』が大入りであり、その当り振舞として天満の川筋へ船を浮かべての酒宴による一杯機嫌でのことであつたという。

……菅丞相が三度迄作り直せし物なれば。木にも魂備はつて我を助けし物やらん。識者の為に罪せられ。身は荒磯の。

島守りと。朽果る後子の世を簞と思し召されよと。仰は外に荒木の天神。河内の土師村道明寺に残る威徳ぞ有難き。

……父は元より籠の鳥。雲井の昔。忍ばるゝ。左遷の身の御歎き。夜は明たれど心の闇路。照すは法の御誓ひ。道明らけき寺の名も。道明寺。迎今も猶榮へまします御神の生けるがごとき御姿爰に残れる物語。尽ぬ思ひにせきかぬる涙の。玉の。木樨樹。珠数の数々くりかへし。歎きの声に只一ト目見返り給ふ御顔ばせ。是ぞ此世の別れとは知らで。別る、別れなり（道明寺段切559）<sup>①</sup>

……南無あみだ笠打かぶり西へ。行足。十万億土。亡骸送る親送る。生ての忠義死たる義臣。一樹は枯し無常の桜。残る二樹は松王梅王。三ツ子の親が住所。末世に夫と白大夫。佐太の社の旧跡も神の。恵と知られる（佐太村段切591）

心を察して源蔵夫婦。野辺の送りに親の身で子を送る法は

なし。我々夫婦が代らんと立寄ば松王丸。イヤ／＼是我子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申。いづれもは門火／＼と門火を。頼み頼まるゝ。

御台若君諸共にしやくり上たる御涙。冥途の旅へ寺入の。師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏。六道能化の弟子に成賽の川原で砂手本い。ろは書子をあへなくも。ちりぬる命。ぜひもなや。あす夜たれか添乳せん。らむうゐめ見る親心。剣と死出のやまけこへ。あさき夢見し心地して跡は。門火にゑひもせず。京は故郷と立別れ鳥辺野。さして運帰る(寺子屋段切刃)

それぞれの部に見る如く、二段目切道明寺に菅丞相と莚屋姫の別れ、三段目切佐太村に白大夫と桜丸の別れ、四段目切寺子屋に松王・千代と小太郎の別れというように、なるほど、各段の切にそれぞれ趣向を凝らした親子の別れ場は等しく配されているのであった。

### 「道明寺」という場名

右の各段の切のうち、二段目の「道明寺」という場名について、堂本正樹氏に次のような主張がある。すなわち、「二ノ切りを「道明寺」と称するのは本来誤り」で、「古典演劇、もしくは文学としてはどこまでも「河内郡領館」である」というものである。②と  
言うのは、「この段で道明寺の字が出るのは、木造の天神が「河

内の土師村道明寺に残る威徳ぞ有難き」という由来と、段切れの「道明らけき寺の名も道明寺とて今になお」という、その後の成立説明に過ぎ」ず、「館を寺に改め「道明寺」としたというのは、本地の説明をする説教節以来の第三者的文章に過ぎない」のであり、「原作を読むかぎり、この場は未だ単なる河内郡領館でしかないのだ。」と、主張が展開される。その上で、「現代人は、その当時の状況を理解し、より原作に近いものを底本として論を立てなくてはなるまい。」と警鐘を鳴らされたのである。③

また、横道萬里雄氏は、「場名の表記」について、「一定の基準を定めるのも、悪くない」として、次のような基準を示された。④

・その場が屋外の場合で、地名がはっきりしている時は、それによる《鈴ヶ森》《御輿ヶ岳》《大川端》《山崎街道》など。  
・寺社の場合は、何々寺、何々社とする《鶴ヶ岡八幡社》《清水寺》など。

・住宅の場合は、持ち主の名に添えて、大名級以上なら館、それ以下なら内とする《足利館》《塩冶館》《由良助内》《与一兵衛内》など。

右の基準によって、大体は統一できようだ、とされた。⑤

これらの主張に対して、真つ向から反論されたのが内山美樹子氏である。その主旨を示すと次のようになるうか。「菅原伝授手習鑑」二段目切、延喜二年二月某日の幕が明いた時、舞台が「道明寺」でなかった事は、堂本正樹氏、横道萬里雄氏の指摘通りである。」が、それは、「狭義の現在時に拘泥」しすぎである。「延

喜二年に庄屋、代官所があり、三十石船が京、大阪を往来する」のであり、「罪業深い覺寿」「やがて神に祀られるべき道真」が「人間苦を負つて仏の救いを求め」た「道明寺の地に今日まで衆生浄瑠璃の時制には、現在形と過去形が混ざり合う。「今道明寺として靈驗あらたに存在し続ける由来は、かくの通りであつた」と、過去八百年と現在とを一つに結びつけるのが語りものの方法」である、というものである。

右の内山氏の反論中に「今道明寺として靈驗あらたに存在し続ける由来」と見え、また、先の堂本氏論考中にも「木造の天神が「河内の土師村道明寺に残る威徳ぞ有難き」という由来」とも見えた。その由来を語るとは、内山氏が言われるように、「菅原伝授手習鑑」の場合、「過去八百年と現在とを一つに結びつける」ということである。堂本氏は、「本地の説明をする説教節以来の第三者的文章に過ぎない」と吐き捨てられたが、本地語りと言い換えてもよい。たとえば、説経『をぐり』の場合、その語り出しは、次に掲げる如くである。

そも／＼この物語の由来を詳しく尋ねるに 国を申さば美濃の国 安八の郡墨俣 たるいおなことの神体は正八幡なり 荒人神の御本地を詳しく説きたて広め申に これも一年は人間にてやわたらせ給ふ

凡夫にての御本地を詳しく説きたて広め申に ⑦  
そして、「それ都に」と、小栗と照天の物語が始まる。「この物

語の由来を詳しく尋ねる」とは、すなわち、「荒人神の御本地を詳しく説きたて広め申」ことであり、それはまた「凡夫にての御本地を詳しく説きたて広め申」ということでもある。その語りはじめに呼応して、次のように、小栗は正八幡荒人神として、照天は契り結ぶの神として齋われたと、物語は結ばれるのである。

それよりも小栗殿 常陸の国へ御戻りあり 棟に棟 門に門を建て 富貴万福二代の長者と栄へ給ふ

その後生者必滅の習ひにて 八十三の御時に大往生を遂げ給へる 神や仏一所に集まらせ給ひてに かほどまで真実到大剛の弓取を いざや神に齋ひこめ 末世の衆生に拝ませんがそのために 小栗殿をば美濃の国 安八の郡 墨俣 たるひおなことの神体は 正八幡 荒人神とお齋ひある 同じく照天の姫をも 十八町下に 契り結ぶの神とお齋ある ある 契り結ぶの神の御本地も 語り納むる 所も繁昌 御世もめでたう 国も豊かにめでたかりけり

右の引用に見える、由来を詳しく尋ねる、あるいは、本地を詳しく説きたて広める、とは、すなわち、縁起を語るといふことである。

本地物として「道明寺」を捉えるという見地からは、先に掲げた本文の 部に見るように、荒木の天神の、「後の世迄」「河内の土師村道明寺に残る威徳」を語るものであり、法の御誓いに照らされて道が明らかという名を持つ道明寺の「今も猶栄へまします御神の生るが」とき御姿爰に残れる物語」として端的に

示されている。

同じく「佐太村」も、部に見るように、白大夫という「三ツ子の親が住所、末世に夫と」知られる「佐太の社の旧跡も神の恵」だと語る佐太の社の旧跡（＝白大夫祠）の本地物として捉えることができる。

ところが、「寺子屋」には、右のような詞章は見えず、本地物としての様相は見取れない。冒頭に引いた逸話の信憑性はともかくも、三人の作者がそれぞれの段で同じような趣向を見せようという立場から見ると、アンバランスだとの感否めな。

### 「今」に繋がる物語

ここで、目を転じて、同じ四段目であるが、口の「天拝山」の段切を見てみよう。

丞相悦喜浅からず。恋しき都の様子を知す。忠義の花は有情の梅王。示現によつて飛來る花は非情の此梅の木。有情非情も隔なく菅丞相を慕ひくる。梅に褒美の御言の葉。梅は飛。桜は枯る世の中に。何とて松のつれななかるらん。く

松王は時平が舍人。枯し桜は宮の舍人。梅王は我が舍人。花の榮へは安楽寺其名も高き飛梅の不思議は今に隠れなし。

……臣が忠義徒に。此所に朽果る。骸は虚命蒙る共死たる後は憚なし。靈魂帝都に立帰り帝を守護し奉らん。天に誓の我願ひ駈は目の前白梅の。気条はつきと折取り給ひ。朝敵

一味の倭人原。退治の手始は是見よと。枝にて丁と打給へば。平馬が首は飛梅の気条も花の乱れ焼。誠の剣も及びなき梅の名作御手の内。親子は恐る、計也。

……魂魄雲井に鳴雷十六万八千の。首領と成つて眷属引キ列都に登。謀叛の奴原引裂捨ん。現世の対面是迄也いそふれやつと御声も。俱に烈しきはやり風。吹立く本堂の薨破して庫裏方丈。薨道戸は木の葉のごとく。庭の立木も飛梅も。花も沙も吹しきる。

……早天帝の恵によつて。形は此儘鳴神の。不思議を見せんと散り残る。梅花を取て口に含天に向つて白梅花。渦く花びら火焰と成て。雲井遙に行末は怪し。恐ろし（天拝山段切

597）

白大夫が菅丞相を野飼の牛に乗せて、太宰府の「埴生の小家」から安楽寺へ向かう道中から、安楽寺へと舞台を移す。そこで、菅丞相を慕い來た梅王と梅の木に感じて、菅丞相が詠んだ「梅は飛」の歌を引き乍ら、安楽寺に飛來した、「今に隠れな」い「飛梅の不思議」を語る。その物語が「天拝山」であると言えよう。

そして、それを承けるかたちで、「靈魂帝都に立帰り帝を守護し奉らん」という誓い、願いのもと、目前の白梅（＝飛び梅）の気条で、時平の家來鷲塚平馬の首を打つ（その様子に、白大夫・梅王父子は恐れをなしている）。続いて、天皇・親王・院の御所を片端から始末して天下を一呑みにするという時平の叛逆に対して、「形は此儘」すなわち菅丞相の姿のままで、魂魄が鳴神となつ

て謀叛の者どもを引き裂き捨てよう、と散り残る梅花を口に含んで吐いて見せる不思議が示され、段切となる。「雲井遙に」飛び行くの意と、行く末を掛けて、怪しく、恐ろしい、と語り収められる、その行く末すなわち今後とは、五段目「大内天変」における、「無実の罪に沈んだ菅丞相の所為」としての、大内における「電光雷火霹靂」打続ての天変」を示唆していよう。それに対して「此靈魂を鎮め」、菅丞相の恨みを晴らすことが行なわれて、菅丞相は天満大自在天神と崇められ、終曲となる。

……菅丞相には正一位の贈官有。右近の馬場に社を築。南無天満大自在天神と崇。皇居の守護神たるべしとの宣旨也……

京に北野難波に天満神、徳奇瑞並なく。榮まします此御神縁起をあらく書残す筆の冥加や御伝授の。伝へる和国に灼然威徳を。崇奉る（大内天変段切628）

そして、舞台上では、天満宮の宮居を飾り、鳥居・玉垣・石燈籠まで趣向を凝らし、菅丞相の人形を飾って見せるという演出が行なわれた、と『浄瑠璃譜』が伝える。

右浄るり五段目時平の人形。桐竹助三郎。花王丸桐竹門三郎。女房八重山本伊平次相勤。道具を左右へ引明れは。天満宮の宮居。正面に飾り。鳥居玉垣石燈籠も。細工美を尽し。社の内には菅丞相の人形をかざり。竹本此太夫。竹本鳥太夫。竹本政太夫。其外の太夫。神主の姿にてはいをなす故。あまたの見物ありがたく思ひ。賽銭山の如く上しとなり。此砌の

人物。はなはだ正直なり。<sup>⑨</sup>

右の大団円は、次に掲げるように、天満大自在天神が菅原道真として人臣でいらつした時の物語として語り始められる大序と呼応していることは言うまでもない。

……唐土計か日の本にも人を以て名付けるに。松と呼。梅といひ。或は桜に准れば花にも情天満。大自在天神の御自愛有し御神詠。ヲロシへ末世に伝て。有がたし。

此神いまだ人臣にまします時。菅原の道真と申し奉り。文学に達し筆道の奥儀を極め給へば。才学智徳兼備り右大臣に推任有り。……（大序489）

末世に伝える御神詠とは、番付の語りに併記される「道明寺二而の御歌」なればこそわかれをいそげとりのねのきこへぬさとのあかつきもかな、「太宰府二而の御歌」むめはとびさくらはかる、よのなかにならんとてまつつれなかるらん」のことである。全体として北野・天満天神の縁起の装いを見せる中で、荒木の天神が残る「爰」道明寺は「後チの世」である「今」もなお栄える、と「道明寺」（二段目切）は語り、「佐太村」（三段目切）も佐太の社の旧跡について「末世」に知られると語っていた（前掲引用参照）。これらと同様に、「今」に隠れない物語として、安楽寺の飛び梅の不思議が示されるのが「天拝山」（四段目口）であるという構図があまり出せる。冒頭の逸話が伝える、「此次は兼てより腹稿ある天満宮の御一代記をしぐみ候つもりなり」として松洛が話したという「其あらましの筋など」があったのだとすれば、

それは如上のようなものではなかったろうか。

ここで、あらためて各段の作者について確認しておく。森修氏は、「三段目佐田村が千柳の作と推定せられるようである」とされた。<sup>⑩</sup>その上で、四段目寺子屋は、「宗輔の手法を思わす」部分もあるが、「出雲の趣向に近い」面も見て取れる、しかし、「四段目についてはそれほど積極的にこれを出雲の作と認めるべき特色はみられぬようである。」との指摘がなされた。そして、「菅原伝授手習鑑」の作者については所伝をすこし改めて、発案者を出雲、二段目を松洛、三段目を宗輔、四段目を小出雲の手になるものとみておくのが一番適切ではなからうか。」と結論づけられた。これに対して、内山美樹子氏も、「二ノ切松洛、三ノ切宗輔という推定が成り立ち、四ノ切も「楠昔嘶」との関係から暫定的に小出雲（二代目出雲）とみなす」とされつつも、「菅原伝授手習鑑」四段目の執筆分担は、当初は恐らく小出雲であったろう。しかし完成時には、小出雲の作と認め難い程、宗輔の手が入っていたのではないか。」との見方を示された。<sup>⑪</sup>宗輔関係の先行作の撰取が四ノ切に集中することも指摘されていることである。それは、二・五段目および四ノ口には竹本座関係作の撰取が集中することに対してのことである。

それぞれの方法は異なるものの、両氏の見解はほぼ同じようなものとなっているかと思われる。「道明寺」（二段目切）が松洛、「佐太村」（三段目切）が宗輔、そして、「天拝山」（四段目口）は小出雲と見てよいであろう。そうすると、三者三様の縁起が「天満

宮の御一代記」の各段に綴られたのが『菅原伝授手習鑑』である、という把握が可能であろう。

#### 『菅原伝授手習鑑』における菅丞相

ここから、初段、二段目と四段目に登場する菅丞相を見ていく。まず、初段の「大内」の部分では、次のように見える。

此神いまだ人臣にまします時。菅原の道真と申し奉り。文学に達し筆道の奥儀を極め給へば。才学智徳兼備りを列ね。菅丞相と敬れ。君を守護し奉らる延喜の。御代ぞ豊かなる。（大内489）

また、筆道伝授の勅定を斎世の宮が伝えたと、次のように展開する。

……仰の中に左中弁宮の前へずつと出。菅丞相の弟子の内位といひ器用といひ。希世に上こす手書はなし。幸い是にて伝授有しと。御申付下さるべしと言はせも敢ず。菅丞相につこと打笑。内裏に有時は我傍輩。筆法は我弟子なれば。此道において師匠を指置き。我儘の願いたされなど。誠の詞……唐倭。文字は何万何千にも。我筆道に。洩しはなし。それ共知らず爰かしこに手習ふ子供も皆我弟子。今日より私宅に閉ち籠。扞出して器量の弟子に筆傳授申べしと。宣ふ詞は今の世に伝へて残る筆道の。道は御名に顕はれて。真成かな誠なる君が。御代こそ豊かなれ。（大内段切



内裏においては、左大臣、藤原時平に座を連ね、左中弁希世とは傍輩である、と同時に、筆法においては師弟関係にある、右大臣（丞相）として、そして、筆道師匠として登場し、退場する。首尾呼応するかたちで、豊かな延喜の御代における公人としての菅丞相が描かれる。

左中弁希世もそうであるが、「手習ふ子供も皆我弟子」と言い、「今の世に伝へて残る筆道」とあるのは、「菅原の一チ流は心を伝る神道口伝。七日も満る今日只今。神慮にも叶ひし源蔵」への筆法伝授を描く初段切「筆法伝授」のみならず、さらには、次に掲げるその段切に見るように四段目切「寺子屋」への伏線であることは、言うまでもなからう。

……束帯氣高き菅丞相。一間の内より立出給ひ。神道秘文の伝授の一卷源蔵に給はりける。当座の面目御流義末世に伝へる寺子屋の。敬申奉る因縁かくとぞ知られける。（筆法伝授517）

このように「あらかじめ事件のために伏線を設けておくこと」は、森修氏が挙げる並木宗輔の特色の一つである。また、「菅原伝授」と「手習鑑」という本作の外題にも繋がり、「今の世に伝へて残る筆道」を「手習ふ子供」が集い、「末世に伝へる寺子屋」の縁起としての作品全体を統一する筆致であることも見て取れる。これは、本作の立作者を宗輔とする内山美樹子氏が挙げる「全体の構想、構成について責任を持つ。」という立作者の職掌の一つ

にも合致しており、「束帯氣高き菅丞相」が「冠正して。参内有」という、いかにも宗輔らしい菅丞相が描き出されていると言つてよいであろう。

次に、二段目では、たとえば、次のように見える。

……産の親の打擲は養ひ親へ立る義理。養ひ親の慈悲心、は産の親へ立る義理。あまき詞も打擲も。子に迷ふたる親心。（杖折檻542）

「親も救さぬ徒らして。大事のく甥の殿流され給ふは誰しがわざ。憎ふてくコレ杖折れる程た、かねば丞相殿へ云訳立ぬ」という覚寿の打擲と、「卒爾の折檻仕給ふな。……父を床しと慕ひくる。刈屋姫に对面せん。」という菅丞相の憐憫の情ある言葉の評してのものである。「帝への恐れ有しは。逢たふても逢れぬ親子」である菅丞相と刈屋姫であつてみれば、「我産た子でも人にやれば。先きこそ親なれこちは他人。夫れを親じやの娘じやと思ふは町人百姓の。訳をば知らぬ子に甘さ」という覚寿の認識に見るように、刈屋姫に对面しよう、というのは、あまい、ということになる。それゆえ、対面しようというのは、「丞相が。魂残す筐」の木像の奇瑞であつたのであるが、産の親である覚寿と対比するかたちで、慈悲心ある養ひ親菅丞相の、子に迷う親心が取り立てられる。

そして、会えぬままの親子の別れについては、次のようにある。……別れにちよつと只一ト目伯母が願ひをかなへてと。立

寄ル袖を引とゞめ。お年ゆへの空耳か。今鳴たは雉に鶏。あの声は子鳥の音。子鳥が鳴は親鳥も。鳴は生有るならひぞと心の歎きを隠し歌。鳴けばこそ。別れを急げ鶏の音の。聞へぬ里の。暁もがたと詠じ捨。

名残は尽きずお暇と立出給ふ御詠歌より。今此里に鶏なく羽た、きもせぬ世の中や。伏籠の内をもれ出る。姫の思ひは羽ぬけ鳥。前後左右を囲まれて。父は元より籠の鳥。雲井の昔。忍ばる、左遷の身の御歎き。夜は明けたれど心の闇路。

#### (丞相名残561)

判官代輝国が菅丞相を迎えに来る八ツの上刻を知らせる一番鶏の奸計に因んで、伏籠の内の刈屋姫を子鳥、それに対して、菅丞相を親鳥とするともに、伏籠の内ならぬ「籠の鳥」とする。ここでは、子に対する、心の嘆き、心の闇を抱える父親という菅丞相の一面が強調される。

養い親、そして、父親である菅丞相として描かれるのは、この場が雲井を離れた地でのことであること、そして、何より菅丞相が「左遷の身」としてある私人だからであろう。内山氏が指摘される竹本座浄瑠璃の伝統である親子恩愛劇と言つてよい。『御所桜堀川夜討』の「藤弥太物語」など、現在まで演じられている親子兄弟恩愛劇の佳曲もあり、「松洛も親子恩愛劇を得意としたであろうとは推測される。」と言われるように、松洛らしい特徴が見て取れるであろう。逆に、「娘を殺され、婿とその父を殺す、取り返しのかね流血惨事の渦中であつて、「何もかも納りし。」

と涼しい顔で由来譚の聞き手に転ずる覺寿の如き人物造形は、並木宗輔（千柳）には不可能である。」との指摘もなされている。

四段目口の菅丞相は、たとえば、次のように見える。

いやとよ我に科なければ。仏に苦勞かけ奉り。身の上折る心はなし。讒者の業としろし召さば罪なき事も世に顕れ。帰洛の勅詔下るべし。夫し迄は菅丞相。月にも花にも目は触れず私なき臣が心帝はしろし召れず共。天の照覧明らか也。

……時平が叛逆一チ々残らず。聞し召れし菅丞相。柔和の形相忽変り。御督に血をそぎ。眉毛逆立テ御憤。都の方を睨付ケ物狂しく立給へり。

白大夫恠し。……

……朝敵一味の佞人原。退治の手始メは見よ……親子は恐る、計也。

……我は見上る此高山絶頂に三日三夜。立行荒行根氣を砕き。梵天帝釈閻羅王三天王に誓を立。魂魄雲井に鳴雷十六万八千の。首領と成つて眷属引キ列都に登。謀叛の奴原引裂捨ん。……

……不思議を見せんと散り残る。梅花を取て口に含天に向つて白梅花。渦く花びら火焰と成て、……恐ろし（天拝山594）一転して、朝敵退治を決意するに至る、恐ろしい菅丞相として描かれている。「天の照覧明らか也。」と達観して柔和であつた形



相が、時平の叛逆を聞いて、一変し、「御憤」を表す様に「悔し」、「恐る、計」であり、さらに、「魂魄雲井に鳴雷十六万八千の。首領と成つて眷属引列都に登。謀叛の奴原引裂捨ん。」と言ひ梅花を口に含み、天に向かつて吐いて見せる不思議も「恐ろし」と評されている。このあたりは近松門左衛門作『天神記』の世界を踏襲していると見てよいであろう。すなわち、『天神記』でも、第三段切では「晏然として顕はれ」、「悔むな恨むな人よ。」と言つていた菅丞相が、第四になると、「今にをいて帰洛の勅詔」がないことで「御いきどほり骨髄に徹し。……鳴雷の神と成。識者時平を蹴殺さんと。……天に向つて大音上。肝胆碎き。御祈誓ある。」という「天づくし」、さらに、参内しないよう法性坊に求めたのを拒否されて、「怒りの気色」を見せ、「忿怒の相好。さもすさまじき」相貌で「恨は尽きじ」と言うに至る。

先行研究の指摘をふまえた上で、『天神記』と『菅原伝授手習鑑』の影響関係の検討、提示が内山美樹子氏によってなされているが、両者の影響関係の最たるものは、「天拝山」という場名ではなからうか。「実は中世末期以前の天神縁起（及び絵巻詞書）には、道真が無実を訴えた山の名称を「天拝山」と明記しているものは一つも無いことは案外注意されていない。」という指摘がある。つまり、『北野天神縁起』では、「扱く／つくしにおはししけるあひだに、御身に罪なきよしの祭文つくりて、高山に登りて七箇日のほど、かや、天道にうたへ申させ給けるとき、祭文漸とび昇り、雲をわけていたりにけり。」と、単に「高山」とのみあ

り、『江談抄』第六（四五）「聖廟の西府の祭文 天に上る事」でも、「聖廟、昔西府において無罪の祭文を造り、山において尋めし訴へしに、祭文漸々に天に飛び上がり」と云々。」と、山の名は不明とする。

『菅原伝授手習鑑』四段目口でも、天拝山という名称は見えない。つまり、右に引用したように、山については「此高山絶頂に三日三夜立。行荒行根氣を碎き。梵天帝釈闍羅王三天王に誓を立。」と見えるのみである。先にふれた堂本正樹氏「歌舞伎伝説——伝統変質の過程と必然——」をふまえて皮肉まじりに「そもそも「天拝山」の名称自体、「道明寺」と同様、「訛伝」というべきであり」と、内山美樹子氏が言われるとおりである。一方、『天神記』では、天拝山を九州一の高山とした上で、次のように、その由来まで語る。抑筑前の国天拝山は九州一の高山。巖そはだつて鋭き剣のごとく。道廻つて羊の腸に似たり。峰には老松枝そびへて朝一片の雲にむせび。谷には瀑川石流れて夜孤林の月を砕く。空飛ぶ鳥木伝ふ猿の声もなければ。まして樵柴人の行通ふべき道もなく。平地を離るゝこと遠く。天に近き心地なれば天拝山とは名付たり。

それをふまえて、「湯水もさらに断食の天拝山の頂に。足を爪立て三七日夜眠らぬ両眼魚のごとく。天に向つて大音上。肝胆碎き。御祈誓ある。」と続く。両作の傍線部を比較してみると、その影響関係は明らかで、天拝山という名称が見えない『菅原伝授手習鑑』四段目口においても、この「高山」が巖聳ち、平地を

遠く離れ、天に近い心地のする「天拝山」である、という了解がなされていたのであろう。

右の『天神記』以外にも、『菅原伝授手習鑑』は「ほとんど、正徳四、五年竹本座、近松外題づくし」、「近松作品のモザイクで記念する作品」との把握が内山美樹子氏によって示されている。<sup>22</sup>そして、『菅原伝授手習鑑』に先立つ五月四日から竹本座では播磨少掾第三年忌「追善仏御前」、故竹本義太夫三十三回忌「追善重井筒」が上演されており、延享三年の竹本座が、この追善興行を強く意識して、「義太夫（筑後掾）から播磨少掾へと、三ノ切語りが交替する正徳四、五年、現竹本座の原点を、近松作品との関わりの中で、掴み出そうとした故」<sup>23</sup>でのことであるとされる。その判断は、内題下の作者欄にその名が見られ、森修氏が発案者と想定された出雲<sup>24</sup>かもしれないし、あるいは、この当時「実質的に座本の仕事をしている小出雲」<sup>25</sup>によってなされたのかもしれない。

これら竹本座のあり方にも関わる点にも含みを持たせ、四段目口「天拝山」には、並木宗輔は言うまでもなく、三好松洛でもなく、竹本座の次期座本としての小出雲の姿が窺えるのではなからうか。内山美樹子氏は、文案における『菅原伝授手習鑑』通し上演における四ノ口「天拝山」カットの慣習化について述べられる中で、『菅原伝授手習鑑』という「完成体の中で主人公の人格の不統一が何故生じたか。」、あるいは、「初段の丞相と四ノ口「天拝山」の丞相、三ノ切「佐太村」の桜丸と五段目の桜丸は、性格的に矛

盾する。何故か。」と問いかけられた。<sup>26</sup>それに対して、「答えは明瞭である。作者が違う。」として、二段目・五段目の担当を三好松洛、初段・三段目の担当を並木宗輔とされた。

立作者によって全体の構想、構成について統一が図られたにちがいない。しかし、それでもなお、それぞれの作者の特徴なり、思惑なりが看取され得るということは、それがかならずしもマイナス評価に直結しないであろうとの見通しがあつてのことだったのであろうか。親子の別れ場なり、天神ゆかりの社寺の縁起なりに合作ならではの楽しみを見出したのであれば、各段の菅丞相が三者三様であつたことも、見巧者にとつてはむしろ聞き所・見所として受け入れられたのかもしれない。

（付記）本稿は、北山円正教授がコーディネートされた二〇二二年度神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ 秋期講座「菅原道真の怨霊と信仰・芸能」（於神戸女子大学教育センター）において筆者が担当した『菅原伝授手習鑑』の道真」（十一月三十日）をもとに成稿したものである。

(注)

① 『菅原伝授手習鑑』の本文引用は、日本古典文学全集『浄瑠璃集』（横山正氏校注・訳、一九七一年十一月、小学館）により、そのページを示す。

② 堂本正樹氏「歌舞伎訛伝——伝統変質の過程と必然——」（『文学』第五十五巻第四号、一九八七年四月）。

③ 初演時の正本や番付などに「道明寺（の段）」と、場名が見えないことは事実である。ならば、「河内郡領館」とすることも、同様に原作に忠実な論とは言い難いのではなからうか。

④ 横道萬里雄氏「歌舞伎の演目名」（『日本の楽劇』二〇一一年十二月、岩波書店）。

⑤ 何もないところに、一からシステムティックに場名を与えていくには有用であろうと思われる。が、氏も「基本的にはこうした統一が望ましいのですが、実際に通用している場名に、簡略で知名度の高いものがある場合は、それを用いることもあってよいと思います。」とも述べられるように、「既に独立した演目名に昇格している」（注②堂本氏論考）「道明寺」という場名に修正を迫るものではなからう。また、統一的に処理される場名と一曲の構成、主題に関わるそれとを同一に扱うことはない。

⑥ 内山美樹子氏「菅原伝授手習鑑」などの合作者問題（『浄瑠璃の十八世紀』一九八九年十月、勉誠社）。

⑦ 新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』（をぐり）は信多

純一氏校注、一九九九年十二月、岩波書店）。

⑧ 小林健二氏は、道真の道明寺訪問譚や道真の形見の木像について伝える、能〈道明寺〉や『菅家瑞応録』では「松洛にとってヒントたり得なかったのである。」として、「松洛は、道明寺の縁起を見聞していた可能性があるのではないだろうか。」

「松洛が「道明寺の段」を構想した直接のヒントは、『道明寺縁起』であつたと思われる。書承・口承を問わず、先に挙げた道真と寛寿の別離譚や、天満宮の御神体である荒木天神の縁起を、松洛が見聞していたことは十分に考えられよう。」とする（『天神縁起』別伝の一展開——『道明寺縁起』から

「道明寺の段」へ——」（『国文学 解釈と鑑賞』第52巻9号、一九八七年九月）。

⑨ 『浄瑠璃譜』（帝国文庫『近松世話浄瑠璃集』一九二八年七月、博文館）。

⑩ 森修氏「浄瑠璃合作者考——並木宗輔の浄瑠璃——」（『近松と浄瑠璃』一九九〇年二月、塙書房）。

⑪ 内山美樹子氏注⑥論考。

⑫ 森修氏注⑩論考。

⑬ 内山美樹子氏注⑥論考。

⑭ 内山美樹子氏注⑥論考。

⑮ 内山美樹子氏注⑥論考。

⑯ 新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 上』（『天神記』は松崎仁氏校注、一九九三年九月、岩波書店）。

- ①⑦ 内山美樹子氏注⑥論考。
- ①⑧ 竹居明男氏「天神信仰と梵天・帝釈天信仰——『北野天神縁起』『天拝山』の段とその周辺」〔國文學 解釈と教材の研究〕第48巻6号、二〇〇三年五月。
- ①⑨ 日本思想大系『神社縁起』（『北野天神縁起』は萩原龍夫氏校注、一九七五年十二月、岩波書店）。
- ②⑩ 新日本古典文学大系『江談抄 中外抄 富家語』（『江談抄』は山根對助・後藤昭雄氏校注、一九九七年六月、岩波書店）。
- ②⑪ 内山美樹子氏「人形浄瑠璃文楽の上演形態」（『浄瑠璃史の十八世紀』）。
- ②② 内山美樹子氏注⑥論考。
- ②③ 森修氏注⑩論考。
- ②④ 内山美樹子氏注⑥論考。
- ②⑤ 内山美樹子氏注②①論考。